

シンボルフラワー「バラ」の 基礎知識 *ABC*



第1回 バラの種類・歴史と楽しみ方

バラ栽培は難しい、手間がかかると思っていますか？
しかし種類を選べば、また栽培のコツをつかめば、気軽に栽培することができます。2010日本フラワー&ガーデンショウでは、通常5月に咲くバラの満開を、2カ月も早く見ることができます。事前に知識を得ておくと、バラはもっと楽しくなり、イベントが断然おもしろくなります。

- 用途によるバラの種類

- ガーデンローズ (庭植え用品種) と切花用品種、FGローズ

- バラの歴史と生活・文化

- 原産地

- バラと生活・文化、歴史

- ガーデンローズの2分類

- オールドローズとモダンローズ

- さまざまな系統と歴史・楽しみ方

- ハイブリッド・ティーとフロリバンダ

- ガーデニングに向けたイングリッシュローズ

- フランスのバラと香り

- 日本のバラ

- 丈夫なバラ

用途によるバラの種類

ガーデンローズ(庭植え用品種)と切花用品種、FGローズ

バラというと、いつも咲いているという印象があるかも知れません。冬の時期にあるのは温室で加温栽培する切花用品種です。

切花用品種は「カットフラワーローズ」とか「フローリストローズ」と呼ばれる種類で ●花保ちが良いこと ●扱いやすいようトゲが少ないことなどが特徴です。バイオ技術によって開発されたサントリーの青バラ「アプローチ」は切花用品種です。また最近人気の赤色の「サムライ08」(フランス・メイアン社作出)も切花用品種です。

これに対し、ガーデンローズは、庭植え用品種のことを指します。 ●屋外で栽培しても病気にかかりにくい ●花が散ることが望ましいといった、切花品種とは異なる性質を要求されます。この両者は基本的に別品種が出回ります。家庭で庭や鉢で栽培されるのは、このガーデンローズのことです。日本の気候の自然開花では5月中旬から咲くもので、四季咲き性品種は約60日間隔で秋まで咲きます。この花を2カ月弱早い3月末に一斉に咲かせようとなると、高度な技術と、たいへんな管理手間が必要になります。2010年日本フラワー&ガーデンショウでは、京成バラ園芸の鈴木満男チーフガーデナーを中心とするスタッフが、この開花調整を行っています。

FGローズ (Florist & Gardener's Rose)

日本において最近増えている、用途からみたバラの種類の総称です。切花品種の花保ちのよさ花形の多様性に、ガーデンローズの育てやすさを併せ持ったバラで、フラワーショップで切花が、園芸店・ガーデンセンターで苗が販売され、フローリストにもガーデナーにも向くバラという意味です。2008日本フラワー&ガーデンショウ会場で行われた「F&Gジャパンセレクション」入賞の「Mia愛子(みああいこ)」(Rose Farm Keiji作出、苗は京阪園芸から販売)や、メイアン社の「ベビー・ロマンティカ」「ミミ・エデン」、オランダ・デルイター社の「アンティーク・レース」「カフェラテ」、ドイツ・コルデス社の「キャラメル・アンティーク」もこのFGローズです。



サムライ08

(写真協力:京成バラ園芸)



Mia愛子(みああいこ)

(写真協力:京阪園芸)



キャラメル・アンティーク

バラの歴史と生活・文化

原産地

バラはバラ科バラ属の木本性植物。原産地は北半球を中心に分布し、原種には150～200種類があると言われます。原種のほか自然交雑した種類もさまざまにあります。

原種にはそれぞれに花形、香りなどそれぞれ特性があり、現代のバラにその性質が受け継がれています。日本原産のロサ・ムルティフローラ（ノイバラ）は西洋のバラと交配されて房咲き性をもたらしたとされ、葉が照るロサ・ルキアエ（ウイクライアーナ）（テリハノイバラ）は、照葉をもたらしたとされます。

原種の多くは春のみ咲く一季咲きですが、繰り返して秋も咲く「四季咲き性」は、中国原産のバラ、ロサ・キネンシスからもたらされたと言われます。



ロサ・ガリカ

バラと生活・文化、歴史

バラは古代ペルシャから、ローマ時代までさまざまに生活と密着してきました。イタリア・ルネサンス期の画家ボッティチェッリによる絵画「ヴィーナスの誕生」や「プリマヴェーラ」は、よく知られます。それらに登場するバラは、主にヨーロッパ原産の「ロサ・アルバ」（アルバは僧衣の意味）という白花の系統や、13世紀以降十字軍遠征によってダマスカからヨーロッパにもたらされた「ロサ・ガリカ」（ガリカは、ヨーロッパの古名ガリア地方に由来）という赤花の系統が主でした。1400年代のイギリスのバラ戦争は、白バラのヨークシャー家と赤バラのランカスター家の内戦で、バラはそれぞれ「ロサ・アルバ」と「ロサ・ガリカ」がモデルとされています。

バラの絵画では、マリー・アントワネットがピンク色のバラを手に持つ肖像画が良く知られていますが、これは「ロサ・ケンティフォーリア」という、当時流行の、花弁の多いバラとされています。

これらは、すべて自然交雑種。人工交配によって品種が開発されるようになったのは、19世紀からのことです。フランスのナポレオン妃ジョゼフィーヌが、マルメゾン宮殿に、世界各国から珍しいバラを集めたことがきっかけです。育種家アンドレ・デュボンによって初めて人工交配のバラが生み出されました。当時愛好されたバラは、バラの画家と呼ばれるピエール＝ジョゼフ・ルドゥーテのボタニカルアート集『バラ図譜』に克明に描かれています。その後、19世紀半ばから盛んに育種が行われるようになり、新品種が続々と登場するようになりました。現在まで、約25,000品種以上が作出され、毎年200品種以上が生み出されていると言われます。



ロサ・ケンティフォーリア

ガーデンローズの2分類

オールドローズとモダンローズ

1867年、フランスのギヨーは、「ラ・フランス」を作りました。この品種は、ピンク色で、現代バラの典型である花弁の先が尖った剣弁（けんべん）、芯が盛り上がって咲く高芯（こうしん）咲きの特徴を備えています。バラの歴史上は「ラ・フランス」作出以前の系統の品種を「オールドローズ」、それ以降作出された系統を「モダンローズ」と呼んでいます。それまでのバラが「ロゼット咲き」といわれる、丸い花びらがたくさん詰まった咲き方でうつむき加減に咲くのに対し、「ラ・フランス」は上を向いて咲くので、当時人気を集めたと言います。オールドローズは主に春のみに咲く「一季咲き」、モダンローズは繰り返して花を咲かせる「四季咲き」という点も大きな特徴です。「ラ・フランス」は、「ハイブリッド・ティー」（交配されたティーローズ）という系統です。



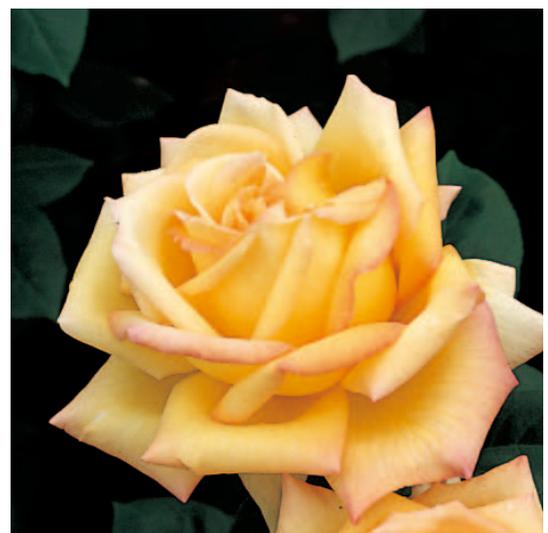
ラ・フランス

さまざまな系統と歴史・楽しみ方

ハイブリッド・ティーとフロリバンダ

第二次世界大戦後、ハイブリッド・ティーを作出する流れはますます進展します。その代表作の一つが「ピース」。フランス・メリアン社1945年作出で、ドイツのバリ空爆を逃れ、戦後米国で「ピース」名で発売、1951年サンフランシスコ講和会議で会場がその花で飾られ、世界平和のメッセージとともに、全世界に広まりました。花径13~16cmという巨大輪で、その後の巨大輪ブームのさきがけとなりました。その後1954年には米国で英国のエリザベス女王の即位を記念して「クイーン・エリザベス」が作出され（房咲きなのでグランディフローラという系統名）、丈夫でよく繰り返し咲くハイブリッド・ティーローズが盛んに開発されてきました。園芸技術をもって咲かせる鮮やかな色彩の、大きな花を観賞します。

それと前後する1940年代、米国のジーン・ブーナーが、房咲き中輪で、株丈が低めの系統を「フロリバンダ」と命名、広めました。フロリバンダは「花束」の意味です。大きめの半八重の花を花壇にたくさん植えると見ごたえがあります。四季咲きです。この2系統がモダンローズの典型とされ、交配が繰り返され、さまざまな品



ピース

(写真協力：京成バラ園芸)

種が開発されました。1958年ドイツ・コルデス社作出の「アイスバーグ」(シュネーヴィツェン)は、50年以上経った現在でも、全世界で最もよく育てられているフロリバンダとなっています。

日本でのバラの育種も盛んになりました。京成バラ園芸の故・鈴木省三氏が「聖火(せいか)」(1967年)、「芳純(ほうじゅん)」(1981年)、「光彩(こうさい)」(1987年)などを作出し、世界にも知られるようになってきました。1960年、イタミ・ローズ・ガーデン寺西菊雄氏作出の「天津乙女(あまつおとめ)」は作出後50年、いまでも世界中で愛好されています。

ガーデニングに向けたイングリッシュローズ

1990年代後半、全世界的にガーデニングブームが起こります。そこで登場してきたのが、再発見・見直されたオールドローズと、イングリッシュローズです。イングリッシュローズは、英国の育種家デビッド・オースチンが作出するブランド。オールドローズの花型・香りにモダンローズの四季咲き性と色彩の多様性を盛り込み、優美な樹形を持つ品種です。花径8cmくらいの中輪です。2009年世界ばら会連合が選ぶ「バラの殿堂」入りした1983年作出の「グラハム・トーマス」などが代表作です。バラの分類では、「モダンシュラブローズ」とされます。1900年代にはハイブリッド・ティーやフロリバンダ全盛で、オールドローズやシュラブローズはほとんど英国でしか栽培されていませんでした。これが、ガーデニングブームにもなって日本でも紹介され、一躍人気となってきたものです。オールドローズやイングリッシュローズは、草花との混植、寄せ鉢などで本領を発揮します。

フランスのバラと香り

それに対してここ数年人気が集まるのが、フランスのバラ。歴史あるメイアン社の品種をはじめ、デルバール社の「フレンチローズ」、ギヨー社、ゴジヤール社などの品種が知られています。ファッションの国のバラだけあって、おしゃれ感がたっぷり。色彩は華やかで優雅、花は大き目です。例えばメイアン社1984年作出の「イヴ・ピアッチェ」は、しゃくしゃく咲きの代表種として古くから知られ、現在も人気で、香り高い花としても著名です。また「ピエール・ドゥ・ロンサール」は日本で最もよく栽培されているつるバラの一つで、10年以上にわたるトップ人気を誇っています。枝変わりの「ブラン・ピエール・ドゥ・ロンサール」や、赤い花で四季咲きの「ルージュ・ピエール・ドゥ・ロンサール」もあります。香水のように香り高い花も人気。デルバール社の「ナエマ」は花名が香水に由来するところから評判を集め、フルティー・フローラルの香りの代表種となっていま



アイスバーグ



芳純(ほうじゅん)



グラハム・トーマス

(写真協力:デビッド・オースチン・ローズ)

す。歌手・渡辺美里に捧げられた「シャンテ・ロゼ・ミサト」は、ほかに無いハーブのブーケの香りが特徴です。フランスのバラは、香水をはじめ、ハンドクリームやボディソープ、入浴剤など人気のバラの香りの製品とともに、生活の中でバラを楽しむのに適していると言って良いでしょう。

日本のバラ

近年は、バラに香りがあることが求められるようになり、香りのある品種が盛んに開発されるようになっていきます。

例えば京成バラ園芸では、香りのバラの育種に力を入れています。その香りが分析され資生堂の香水「ばら園」ができ、「バラの香りの7分類」のもととなった「芳純(ほうじゅん)」が最もよく知られます。最近の作出品種では、フロリバンダの「夢香(ゆめか)」「薫乃(かおるの)」、ハイブリッド・ティーの「桃香(ももか)」「あゆみ」が香り高い品種です。

従来の花型に無い、自由な咲き方の品種を開発する動きも盛んになってきています。前述のFGローズや、河本バラ園作出の「ミスティ・パープル」や天使のバラ「ヘブンシリーズ」など、従来の型にはまらない咲き方の品種が開発され、受け入れられているのも日本独自の動きです。花は相対的に小ぶりで色彩も繊細。日本ならではのバラの新しい動きです。

丈夫なバラ

全世界的に「丈夫なバラ」を開発することも、大きな流れとなっています。「丈夫」とは、葉が黒点病やうどんこ病に強く、たとえ葉を落としても再度萌芽して花を咲かせる品種、そして生長力に優れる品種です。無農薬あるいは低農薬で放置しても花を咲かせ続けることで、花を一輪観賞するより、集団で植えて株姿全体を観賞するのに向いているので、ランドスケープローズとか、日本では「修景(しゅうけい)バラ」、フランスでは「ローズ・ペイザージュ(景観をつくるバラ)」と呼ばれます。バラの系統としてはシュラブに属します。その一つ「ノックアウト」は、一重の花が次々と咲くことから人気を集めています。家庭の庭はもとより、公共の園芸にも最適なバラと言えるでしょう。

協力: New Roses

今回は、「バラを手軽に栽培」をテーマにお届けします。



ナエマ

(写真協力: 河本バラ園/花ごころ)



夢香(ゆめか)

(写真協力: 京成バラ園芸)



ミスティ・パープル
(写真協力: タキイ種苗)



ブラッシング・ノックアウト
(写真協力: 京成バラ園芸)